



# 写真甲子園 2020 結果発表!!

毎年、全国の高校生が高校写真部日本一を目指して東川の地に集う写真甲子園。今年はコロナ禍の影響を受け、初戦応募作品のみで審査を行い、本戦出場賞と審査委員賞を授与する形となりました。

初戦応募337校の中からブロック審査会に80校が進出し、ブロック審査会で本戦出場の18校が決定（この18校は来年の写真甲子園2021のブロック審査会へのシード権を獲得）。本戦では特別賞である審査委員賞7校を選出しました。このページでは各審査委員の全体講評を、次ページからは本戦出場校の全作品をご紹介します。

各作品への講評はWEB上で公開しています。ぜひ右下のQRコードからご視聴ください！

## ●本戦大会講評



審査委員長  
立木 義浩  
(写真家)

コロナ禍の影響で初戦の写真から最終的に18校を選ぶことになった。応募写真はオンラインでチェックしながら、メッセージは紙で見るという方法は馴染めないものだった。20数年間、対面での審査が身に染み込んでいるので、スポーツ選手が無観客試合で感じるであろう寄る辺なさを経験しました。地元故郷での制作なので地域色が濃く現れ、不自由な生活の中から生み出した写真に出会えたのは喜びです。コロナのせいでネガティブなタイトルも些か見られましたが、メッセージ全体から進る明日に向けての希望が伝わって来ました。異常な日々を送りながら、正常を極めてください。



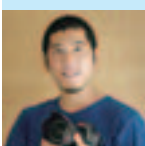
審査委員  
中西 敏貴  
(写真家)

どれだけの時間を家で過ごしたのでしょうか。その長い時間の中で、どれくらい写真のことを考え、何枚の写真が撮られたのでしょうか。こうして本戦に残った18校の写真を見ると、そこにかけた情熱がダイレクトに伝わってくるかのようです。写真は量が質に変わる。そう信じて疑いませんが、18校の写真を眺めているとその信念が間違っていないと確信します。写真甲子園で勝つための法則はありませんが、撮り続けることでその答えに近づくことは間違いないようです。働く人、地域の人を撮るといふこれまでのスタンダードな手法とは異なる方法で、新しい発想・コンセプトによる組み写真が生まれつつあるように感じた2020年の審査でした。



審査委員  
鶴巻 育子  
(写真家)

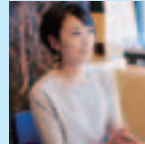
今年はコロナの影響により出場者と顔を合わせる事のない異例の審査会となり、作品意図など知りたい情報が得られない状況での講評で、出場者、審査員共に不完全燃焼な部分もあったように思います。ブロック審査を通過した作品群は、この状況下の中で撮影に工夫が見られ、各学校の色が写り見応えのある内容でした。その中で気に入ったのは、組み写真の難しさ。多くの学校に見られましたが、必要ないカットが1~2枚含まれていた場合が多く、それによってまとまりが薄れてしまったことです。そのような内容を生徒たちと一緒に話し合える機会があれば、と強く思いました。



審査委員  
公文 健太郎  
(写真家)

出場校が東川に一堂に会し、一斉に同じテーマで写真を撮る例年の写真甲子園本戦。その厳しい環境では撮影者の工夫と、チームワーク、撮影技術の地力が試されます。けれども今年の本戦はあらためて撮るのではなく、地元で自分たちの時間を使い、自分たちのテーマで撮られた作品を再度審査するかたちとなりました。より深読みをし、顔の見えない作者が何を考えて撮ったのか、行ったことのないその場所にどんな空気が流れていたのかを沢山想像しながら写真を拝見しました。今年はそういう意味では瞬発的に良い絵を作れる技術よりも、自分たちの周りにおける時間の流れ、人の魅力、感情、場所の持つ力を、しっかりと感じながらどれだけ濃く写真に落とし込むことができたか、が問われたように思います。写真は技術だけでは感動を生まないということをあらためて感じました。

## ●初戦・ブロック審査会講評



審査委員  
小高 美穂  
(フォトキュレーター)

この世界規模の危機的な状況において、高校生たちにとって一体写真がどのような意味を持ち、写真でどのようなことができるのか、とても気になっていました。応募作品には現在の彼ら彼女らの暮らしや内面が反映されているものが多く、直接的な主題としてもこの社会状況を扱ったものも多かったです。しかしその一方で、そのような状況にあっても自らの表現したいものをブレずに撮るといふ信念を感じさせる力作も多く、見ている私もとても力をもらえるような応募作品に出会うことができたことをとても嬉しく思いました。今回はそうした甲乙つけがたいくらいの作品が多かったように思います。



審査委員  
野勢 英樹  
(北海道新聞社  
写真部部長)

コロナウイルスの影響を色濃く感じた今年の写真甲子園でした。休校期間が長期に及び、撮影や作品作りに十分な時間がかけられなかった学校が多かったことでしょうか。テーマ選びや写真の選定で、中途半端に終わってしまった作品が散見されました。初戦審査は例年、11ブロックを1日で行うのですが、今回はweb上で数日をかけて行うことができたため、応募作をじっくりと時間をかけて審査することができました。メッセージから皆さんの撮影意図を読み込んだため、作品に対する理解度が高まりました。真摯に作品作りにかけた思いが伝わり、うれしく思いました。



審査委員  
村上 悠太  
(写真家)

僕自身、高校生活を東川への道に全てをかけていたので、東川での本戦開催が叶わなかった本年、みなさんの心情を考えると本当に胸が詰まる思いです。しかし、初戦作品を見るとそんなネガティブな状況にも負けない、力強く、またコンセプトが濃い作品が昨年以上にそろった印象が強く、今回の事象を皆さんが一つの経験として受け止めている様子を感じました。一点、技術面で挙げることがあるとすると、プリントのクオリティはまだまだ丁寧にはできるはずですが、色、階調や紙選び、郵送中の傷対策など、みなさんの思いをその作品を見るすべての人へつなぐ大切な架け橋ですので、プリントには最後まで徹底的にこだわってください。

公式動画はこちら！



写甲公式  
YouTube



ブロック審査会  
Webレビュー



本戦  
Webレビュー

公式SNSはこちら！



写甲公式  
Facebook



写甲公式  
Twitter



写甲公式  
Instagram